

自閉症児における「家族の行動」に対する報告言語行動（タクト）の獲得と般化の検討 — 家族のコミュニケーションに対する評価を中心に —

特別支援教育学専攻
心身障害コース

M10092J

大矢美喜

I. 問題と目的

本研究では、報告言語行動（タクト）が十分に獲得されていない自閉症児を対象にタクト獲得のための指導を行い、その般化を検討すると共に、家族のコミュニケーションに対する評価の変化について検討する。

II. 方法

1. 対象児

対象児は小学4年生の自閉症男児1名(9才)とであり、研究協力者として男児の妹である小学1年生の健常な女児1名(7才)が参加した。対象児は、通常小学校の特別支援学級に在籍している。9歳8ヶ月時に行った新版K式発達検査では、認知・適応が4:0、言語・社会が3:1、全領域が3:5であった。

2. 指導期間及び指導場所

20XX年6月から2週間に1回程度、A大学附属センターにおいて実施した。1回の来所につき、2セッションの指導を行った。

3. 研究デザイン

本研究は、前訓練期と本訓練期にわけた。本訓練期はベースライン(以下、BL)期(1)、介入期、BL期(2)、般化プローブの4つのステップにより構成された。

4. 手続き

1) 前訓練期

(1) 目的

前訓練期は、対象児の動詞の語彙を増やすとともに、指さしや視線の共有などの共同注視の強化を目的に行われた。

(2) 指導手続き

対象児の視界に入る範囲の2~3メートル離れた位置でSTがある行動を行い、それをメイントレーナー(以下、MT)が対象児の名前を呼び注意を引いてからサブトレーナー(以下、ST)を指さし、「何してる？」と尋ねた。標的行動は、STの行動に対して、MTが

指差しと同時に「何してる？」と先行刺激を提示した後に「○○(物品)を□□(行動)する」と答えることであった。

(3) 結果及び考察

前訓練期の結果をFig.1に示す。TR IやTESTでは80%や100%の高水準な正反応率がみられた。BLは、事前に学習していない行動であったため、対象児は回答できなかったと考えられる。その後、TR IIにおいて反復的に練習することで、BLで答えられなかった行動についても適切に回答できるようになった。さらに、対象児は前訓練期を通して、MTが指をさした方向に注視するという行動を獲得した。以上の前訓練期により、対象児が報告的言語行動を獲得するに十分なベースとなるスキルを持っていると判断した。

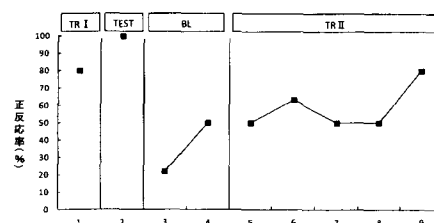


Fig.1 動詞課題における正反応率

2) 本訓練期

(1) 目的

本訓練期は、報告言語行動獲得のための指導を行うことを目的とした。

(2) 標的行動

先行刺激「○○(家族)、何してた？」という教示に対し、「○○(ちゃん)(は)、△△をする(していました)」と答えることを正反応とした。

(3) 指導手続き

観察を行った対象は、BL期(1)~BL期(2)は妹、般化プローブ期は母親であった。

① BL期(1)

先行刺激のみを提示した。

② 介入期 (1)

先行刺激と同時に、妹の顔写真と妹の行動を示すカード1枚を提示した。

③ 介入期 (2)

先行刺激と同時に、妹の顔写真と妹の行動を示すカード2枚を提示した。

④ BL期 (1)

先行刺激のみを提示した。

⑤ 般化プローブ期

先行刺激のみを提示した。

⑥ 家庭での指導

家庭において行われた指導は、両親により指導室とほぼ同じ手続きで行われた。家庭で用いられた手続きは、指導室場面で行われている手続きとは時期がずらして行われ、指導室場面で進んでいる手続きの1つ前のステップの手続きにより実施された。

3) 質問紙調査

対象児が報告言語行動を獲得する前後の、家族の対象児とのコミュニケーションに対する評価の変化を検討するため、家族に対して対象児とのコミュニケーションについて尋ねる質問紙調査を行なった。回答を求めた対象は、父親、母親、妹の3名であった。

III. 結果

1. 介入について

対象児に対する指導室における指導についての正反応率をFig.4に示した。BL期(1)において、正反応は確認できなかった。介入期(1)では徐々に正反応は上昇していった。介入期(2)では、11セッション目に妹の行動を「トランポリンをする」に設定したところ、正反応率が60%にまで減少した。BL期(2)では正反応率は100%、100%であった。般化プローブ期においては、正反応率は0%であった。

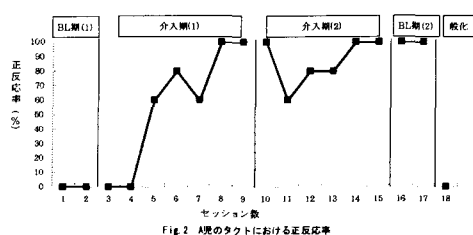


Fig.2 4児のタクトにおける正反応率

2. 家庭での指導について

家庭での指導における正反応率は、全体で93%であった。

3. 質問紙調査について

家族の対象児とのコミュニケーションに対する満足度以外の項目において、大きな変化は見られなかった。

IV. 考察

1. 介入について

介入を通し、対象児は適切な選択を獲得し、自分の目で確認した出来事を正確にタクトできるようになっていった。妹以外の家族について、獲得した行動の般化は見られなかった。般化が見られなかった要因として、文法的な回答のパターンを統一しなかったことが考えられる。

2. 家庭での指導について

家庭での指導において用いる妹の行動を増やした指導室場面の13セッション目の頃から、指導室における他の刺激(「ボールをする」など)の正反応率も比較的早期に上昇した。指導機会が増え、尚且つ継続的に行われることにより、回答する内容や場面が異なっても般化しやすくなるのではないかと示唆される

3. 質問紙調査について

介入前後において、量的な変化は見られなかったが、質的な変化はヒアリングなどを通して確認された。尺度において用いた項目が主観性に左右されるため、日々の感情に大きく依存することが要因であると考えられる。

V. 総合考察

指導室と家庭での指導を並行して行うことにより、報告言語行動(タクト)の獲得がスムーズであるということが本研究により明らかになった。より日常に近い場面を指導に用いることや、回答に用いる文法パターンを固定化することが、般化を促すためには有効であることが示唆された。

家族のコミュニケーションについて、「会話ができていいる」感じる事が、コミュニケーションの評価に影響を与えることが示唆された。

主任指導教員 井澤信三

指導教員 井澤信三